



Data

監督: 濱口竜介
 脚本: 濱口竜介、大江崇允
 原作: 村上春樹『ドライブ・マイ・カー』(短編小説集『女のいない男たち』所収 / 文春文庫刊)
 出演: 西島秀俊 / 三浦透子 / 霧島れいか / 岡田将生 / 安部聡子 / イ・ユナ / コン・ユンス / ジヤニス・チャン

👁️👁️ みどころ

ノーベル文学賞直前(?)の村上春樹の短編小説を、三大映画祭の制覇で、今やキム・ギドク監督と並んだ(?)濱口竜介監督が、179分の長編に!その脚本はひょっとして原作越え!

導入部では、演出家×脚本家夫妻の奇妙なセックス(?)とシェエラザードぶり(?)に注目!妻の浮気は?妻の死は?その責任は?喪失感は?

中盤の舞台は広島。劇中劇としての“濱口メソッド”による『ワーニャ伯父さん』の稽古風景は興味深い。しかし、そこで見る男同士の対決は?最後は北海道へのロードムービーだが、中盤から登場する若い女の運転手に注目!その技量は?勤務ぶりは?出自は?2人の触れ合いは?

そして、本作結末に訪れる人間の再生とは?よくぞ、村上春樹文学の短編をここまでまとめ、高めたもの。こりゃ傑作!こりゃ必見!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 『ドライブ・マイ・カー』とは?登場人物たちは? ■□■

『ドライブ・マイ・カー』は、村上春樹の『女のいない男たち』に収録された短編小説の1つで、『文藝春秋』(2013年12月号)で発表されたもの。彼が2017年に発表した『騎士団長殺し』は、「第1部 顕れるアイデア編」、「第2部 遷ろうメタファー編」に分かれる長編だったが、『ドライブ・マイ・カー』は、演出家の家福(かふく)悠介とその専属運転手になった若い女性・渡利(わたり)みさきの“会話”を中心とした短い物語。そこには、家福の妻である家福音(おと)や、音の若い浮気相手の1人である高槻耕史も登場するが、物語はいたってシンプルだ。

ちなみに、『Drive My Car』はビートルズが1965年に発表したシングル曲の1つだが、なぜ、そこには主語がない?この曲の歌詞は、「Baby you can drive my car」と繰り返

返されるが、その意味は、将来有名な映画スターになると信じている若い女の子から「あなた、私の車を運転しなさいよ」と呼びかけられ、更にその後、「And maybe I love you」（「そしたら、あなたのこと、好きになるかも」）というたわいもない会話だ。

それに対して、村上春樹の小説『ドライブ・マイ・カー』は、24歳の女性・渡利みさきが50歳の家福悠介の専属運転手になるというものだから、かなり珍しいパターン。本来、後部座席に座るご主人様と専属運転手の会話は控えめが原則であるにもかかわらず、同作では、ラストに向けて親密度と深刻度を増していく2人の会話がポイントだが、そんな設定の短編小説だから、所詮テーマは絞られている。したがって、いくら近時の成長著しい濱口竜介監督がその映画化を狙っても、脚本作りは難しいはずだ。しかし、しかし…。

■□■濱口竜介脚本は村上春樹原作越え！■□■

パンフレットにある「Director's Interview」によると、「原作は短編なので、映画にするためには材料が明らかに足りない。なので膨らまさないといけなけれど、それが物語にとって見当違いなものではないわけですね。プロットを書く際に原作を何度も読み返すうちに、『女のいない男たち』に収められた同時期に書かれた作品にはやはりどこか互いに共通するものを感じました。特に『シェエラザード』と『木野』です。『シェエラザード』は、音と名付けた家福の妻の人物像をより立体的にするために、『木野』は家福が向かう、原作のその先を指し示している気がしました。それで原作短編『ドライブ・マイ・カー』の前後が埋められるような感覚があったので、お手紙で村上春樹さんにもそれらのモチーフを使う許可をいただきたいとお願いしました。幸いご快諾をいただき、現状のような形になってます。」と述べている。なるほど、なるほど。

『シェエラザード』は、「千夜一夜物語（アラビアンナイト）」の語り手であるシェエラザードの物語をテーマにしたリムスキー＝コルサコフの美しい交響組曲のタイトルだが、村上春樹原作の短編『シェエラザード』は、主人公が性交するたびに、興味深い不思議な話を聞かせてくれる4歳年上の35歳の女に名付けた名前。同作では「私の前世はやつめうなぎだったの」という、いかにも村上春樹流の奇怪なストーリー（？）が展開していく。さらに、もう1つ、そんな女性・シェエラザードが語るのは、「空き巣に入っていた10代の女の子の頃の物語」だが、これを濱口竜介監督が3時間にわたる本作の導入部で登場させたから、そのインパクトは強烈だ。また、その会話は本作の主人公・家福悠介（西島秀俊）と家福音（霧島れいか）が冒頭に展開する異様なセックスの在り方（？）を強く印象付けることにもなった。

それを含めて、本作は、わずか数十ページの短編小説『ドライブ・マイ・カー』を原作にしたにもかかわらず、映画は3時間にも上る長尺になったから、本作を鑑賞するについては原作と脚本の両者をしっかり対比させたい。そうすると、きっと、濱口竜介監督の脚本は村上春樹原作越え！そう思えるのでは？

■□■三大映画祭を制覇！濱口竜介はキム・ギドクと同列！■□■

キム・ギドク監督は、①『サマリア』(04年)、『シネマ7』396頁)で第54回ベルリン国際映画祭で銀熊賞(監督賞)、②『うつせみ』(04年)、『シネマ10』318頁)で第61回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞(監督賞)、③『アリラン』(11年)、『シネマ28』206頁)で第64回カンヌ国際映画祭のある視点部門作品賞を受賞した。

それと同じように、濱口竜介監督も①第77回ヴェネチア国際映画祭で黒沢清監督が銀獅子賞(監督賞)を受賞した『スパイの妻(劇場版)』(20年)、『シネマ47』53頁)の脚本執筆に野原位、黒沢清と共に関わり、②『偶然と想像』(21年)で第71回ベルリン国際映画祭の審査員グランプリを受賞し、③『ドライブ・マイ・カー』で第74回カンヌ国際映画祭の脚本賞を受賞しているから、韓国の鬼才、キム・ギドク監督と同列！

■□■この夫婦の奇妙な共同作業は？これで作品が完成！■□■

舞台俳優でもあり、演出家でもある家福は今50歳だから、脚本家である妻とのセックスは週に1回程度？それはともかく、導入部で紹介されるこの夫婦のセックスはそれなりに濃密だが、変わっているのは、コトが終わった後、あたかも「千夜一夜物語」を物語る女性・シェエラザードと同じように、音が静かに物語を語り始めること。それが、村上春樹の原作『シェエラザード』に書かれている「空き巣に入っていた10代の女の子の頃の物語」や、「やつめうなぎ」の奇妙な物語だ。

もっとも、音は一方的にこれを物語るだけで、翌日には何も覚えていないところがミソ。したがって、それを聞いた家福は翌朝、愛車のサーブを走らせながら助手席に座る音に、昨晚聞いた物語を語り直すのが習慣だ。さらに興味深いのは、脚本家の音がそんな夫の話聞きながら物語の要点をスマホにメモし、それを作品に仕上げることだ。

なるほど、なるほど。舞台俳優兼演出家の家福と脚本家の音が、夫婦としてここまで相協力できるのは素晴らしい。したがって、家福はそんな音との満ち足りた夫婦生活を、後述する「唯一の例外(妻の浮気)」を除いて十分満足し、楽しんでいたが・・・。

■□■愛車は赤のサーブ！主人公のこだわりは？変人ぶりは？■□■

私が運転免許取り立て直後に購入したフォード・コルチナという外車は、いろいろと世話の焼ける車だった。それに比べれば、2代目以降のクラウン、マジスタ、セルシオはエンジン室を開く必要すら全くないほど、トラブルのない車だった。私の友人の1人の愛車が家福と同じサーブだったが、それも同じように、たびたびトラブルが。そんなサーブに家福は15年間も乗っているそうだから、同車への愛着は相当強いらしい。そんな家福だから、後述のとおり、本作のメインストーリーになる広島国際演劇祭で「ワーニャ伯父さん」の演出を引き受けた際に、専属運転手を強制されると、かなり抵抗したが・・・。

車は動くための道具だから、頑丈で手間がかからなければいい。私はそう考えているが、家福のような古いサーブにこだわっている男は“変人”と相場が決まっている。そもそも、村上春樹作品に登場する主人公は変人ばかり(?)だが、本作では、家福が愛車を運転し

ながらいつも聞いている「ワーニャ伯父さん」のセリフを入れたテープに注目！俳優であり演出家でもある彼の“家福メソッド”は、濱口竜介監督が信奉し、実践している“濱口メソッド”そのものだが、その狙いはいかに？

他方、車の運転中にずっとカセットテープを聴くことが危険とは言えないが、それにあまり熱中しすぎると……。ちなみに、原作の「サブ900」は黄色のコンバーティブルだが、濱口竜介監督はあえてそれを赤に変えたから、そのことへの賛否の声は強い。『キネマ旬報9月上旬号』の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家とその点も含めて本作への賛否の姿勢を明確にしたうえ、星3つ、5つ、4つと評価も分かれている。愛車へのこだわり（の分析）は、50歳の主人公・家福のキャラを読み解くうえで最も近道になるはずだ。

■妻の浮気現場を目撃！その時の夫の行動は？■

音は家福の公私にわたるパートナーとして申し分のない存在だが、唯一の例外は、音の裏にはいつも若い男の影がちらついていること。しかも、それは1人や2人だけではなく、脚本ができるたびに男が変わっているらしい。そんな日々の生活（？）が、夜な夜なシェエラザードになった音が家福に語る奇妙な物語に反映されているようだ。現に、家福が『ゴドーを待ちながら』の舞台を終えた後、音が家福に紹介した若い役者・高槻耕史（岡田将生）は「奥様にはいつもお世話になっています」と語り、いかにも親しそうな雰囲気を見せていたから、彼はそんな男の1人？

役者や演出家に出張が多いのは当然だが、ある日、ウラジオストクへのフライトが寒波のためキャンセルになってしまった家福が、仕方なく自宅に引き返すと……。？玄関のドアを開けると、大音量で流れるクラシックの音楽と共に喘ぎ声が聞こえてきたが、そこで家福が目撃したのはまさに音の浮気現場だったから、家福はビックリ！こんな場合、普通の男ならその後の行動は決まっているが、本作の家福の行動は村上春樹作品らしく、普通の男とは全然違うので、それに注目！気づかれないように静かに家を出た家福は近くのホテルに入り、ウラジオストックに到着したと思いついでいる音と「無事に着いた？」、「うん」と話したが、それは一体なぜ？

■妻の告白は？妻の死はなぜ？その責任は？喪失感は？■

家福と音の間には子供はいない。しかし、小さな女の子の写真と位牌が置かれ、喪服姿の家福と音が並んでお経を聴いているシークエンスを見ると……。？その日の帰り道での2人の会話や、帰宅後のいつもより激しいセックス、さらに、その後の音の物語を聴いていると、家福と音の夫婦仲は安定しているような、不安定なような……。？そう思っていると、案の定、翌朝、「昨日の話、覚えている？」と切り出した音は、「今晚帰ったら少し話せる？」と真正面から話してきたから、それに対して家福は？

誰だって、曖昧なことをハッキリとさせたいと思うのは当然だが、コトをハッキリさせるには不安が伴うのも事実。そのため、人間にはあえて真実から目を背けたいと思う気持

ちも働くもの。どうも、その日の家福はそうだったらいい。そのため、妻からそう言われたのなら早く帰宅すればいいのに、家福は逆にあえて目的もなく車を走らせながらカセットテープの暗唱を続けていた。そして、既に明かりの消えてしまった家に戻り、床を見ると、音が倒れていたからビックリ。コロナ禍の今ならともかく、誰でもスマホを持っており、医療体制が整備されている昨今、いくら急なクモ膜下出血であってもこんな状態で音が死んでしまうことは考えられないが、そこは映画だから何でもあり。しかして、音があの日の晩、帰宅した家福に対して伝えたかった話とは一体何？音の葬儀の弔問客の中には高槻もおり、彼は悲しみを抱いた面持ちで家福に頭を下げていたが、その腹の中は？

音の死亡後も音の声が入ったカセットテープは愛車の中で活用されていたが、家福の気持ちの中で、音の喪失感は一層深刻だ。あの時、音は一体何を告白しようとしたの？もし、自分がもう少し早く帰宅していれば・・・？そんな気持ちから逃れることのできない家福は、舞台俳優の仕事をやめしまったようだ。そして、音の死から2年後の今、広島国際演劇祭から「ワーニヤ伯父さん」の演出を依頼された家福は、東京から広島へ車を走らせていた。赤のサーブも車の中のカセットテープも昔のままだが、今の家福は音の喪失感を抱えたまま、どのように変化（成長）しているの？

■□■若い女の専属運転手に注目！腕前は？勤務は？出自は？■□■

本作前半では、家福の妻・音の人物像設定の不思議さにビックリさせられたが、後半からは家福の専属運転手として登場する渡利みさき（三浦透子）の人物像の不思議さにビックリ。広島で「ワーニヤ伯父さん」の演出指導をする家福は、演劇祭プログラマーの柚原（安部聡子）とドラマトゥルク兼韓国語通訳を担当するユンス（ジン・デヨン）から、自ら運転することを禁じられ、専属運転手をつけることを義務付けられたが、家福はそれを断固拒否！それは、愛車のハンドルを他人に委ねることの拒否感だけではなく、運転時間にカセットテープを聴き、セリフの確認作業に当てている家福にとって、その習慣そのものが大切だからだ。そんな家福にユンスは「テストドライブだけでも・・・」と提案し、小柄な若い女性・渡利を紹介したが、意外や意外、その運転技術は家福以上に素晴らしかったから、ビックリ。それは一体なぜ？それについては、本作後半から詳しく渡利の複雑な出自が語られるから、それに注目！

渡利は家福から「運転手としての技量に申し分なし」と言われたことを率直に喜んだが、それ以上の問題は、家福と専属運転手との相性。専属運転手は、喋りすぎてはだめだし、気が付きすぎてもダメ。しかも、それはすべて後部座席に座る（はずの）家福の性格との兼ね合いだから、そこが難しい。私も、弁護士生活が最も忙しい時期に、事務員の中から安心できるドライバーを選んで運転させていたが、車の中でいつもカセットテープをかけてセリフを暗唱している家福の姿に渡利はビックリしたはずだ。さあ、そんな2人の相性は？その稽古姿に注目！

■□■劇中劇は面白い！多言語劇には手話も！■□■

劇中劇は面白い！それを全世界に発信した名作中の名作が、若き日のシェイクスピアと彼を信奉する上流階級の娘を主人公にした『恋におちたシェイクスピア』（98年）だった。劇中劇では、どこまでが現実？どこまでが劇？、の狭間で面白いうえ、同作では“女装した男性俳優”という今風の演出と問題提起が秀逸だった。

本作で今、家福が演出指導しているのは、チャーホフ作の「ワーニャ伯父さん」。その稽古風景では、家福がいつも車の中で聴いている「ワーニャ伯父さん」のセリフが本読み（棒読み）の中で登場するので、それに注目！今回の家福の演出がユニークなのは、「ワーニャ伯父さん」を多言語劇として構成している上、手話まで登場させることだ。オーディションで選ばれた俳優たちは①ワーニャ役の高槻、②韓国語と手話のイ・ユナ（パク・ユリム）、③北京語のジャニス・チャン（ソニア・ユアン）たちだ。本作中盤では、この本読みに精を出す出演者たちと、その指導をする家福の姿をじっくり観察したい。

感情を込めずに、ただひたすら棒読みを繰り返す“家福メソッド（濱口メソッド）”にどんな意味があるのかは私にはよくわからないが、さて、出演者たちの満足度（不満度）は？とりわけ、歳が違い過ぎるにもかかわらず、ワーニャ役とされた高槻は違和感があるらしい。「意に沿わないなら、契約書にサインしなければいい。別の役者に役が行く」とまで言われ、やむなくサインしたが、ある日、本読みの後、そんな高槻から「家福さん、もしよかったら一杯いかがですか？僕のホテルのバーとか」と声を掛けられたから意外。そして、バーでの2人の会話は次第に家福の亡き妻・音の話になっていったが、それは一体なぜ？

■□■殺人事件発生！主役が逮捕！舞台は中止？それとも？■□■

本作の前日にオンライン試写で観た韓国映画『殺人鬼から逃げる夜』（21年）は、聴覚障害者がタイトルどおりの「殺人鬼から逃げる夜」をスリングに描いたもので、『見えない目撃者（我は証人）』（15年）（『シネマ44』278頁）の向こうを張った秀作だった。同作では、一見おだやかな笑みが特徴の、紳士的な若者が実は連続殺人を繰り返すサイコパス男だったが、それと同じように（？）本作の高槻も今風のカッコいい若者だが、どこか捉えどころのないのが特徴。夫の留守中に堂々と音の家に上がり込み、大音響の中のリビングルームで“お楽しみ”をしていたのだから、ある意味で“大した玉”だ。そんな高槻がシャーシャーと、家福が演出指導する『ワーニャ伯父さん』に応募してくるのだから、その役者根性もすごい。もちろんそれは、音の葬儀で見た丁寧な挨拶ぶりも含めてだ。

村上春樹文学は、人間の本性の奥の奥に立ち入った分析が特徴だが、家福はそんな高槻と音の浮気現場を目撃しながら、なぜ逃げるように現場を離れてしまったうえ、目の前にいる高槻を責めないの？あの日、高槻から誘われて一杯飲んだ時も、亡き妻の話題になっていく中、なぜ家福は平然と対応できたの？なぜ家福に感情の爆発がなかったの？

音がシェエラザードになって語る物語は、自覚がなくとも自分の浮気体験が元になっている可能性が高い。夫と妻のセックスの最中にそんな深層心理が働くことを発見し、分析

し、それを短編小説にまとめた村上春樹はたしかにすごいが、それはあくまで文学作品の上での話だ。同じ文学でも松本清張は推理小説だから、必ず殺人事件が発生し、その中で複雑な人間の深層心理が描かれていた。しかし、村上春樹文学は推理小説ではないから、本作でも殺人事件など登場するはずはない。そう思っていたが、少し怪しげなシークエンスから少し嫌な予感も……。そして、ネタバレ厳禁ながら、本作には何と殺人事件も！

そんな中、長い稽古の中で今やワーニャ伯父さん役がすっかり板についていた高槻が警察に逮捕されてしまったから、アレレ。さあ、『ワーニャ伯父さん』の上演はどうなるの？ ユンスと柚原が言うように、選択肢は上映中止、もしくは家福が高槻の代役になる、の二択だが……。

■□■サーブは一路北海道へ！その結末に見る人間の再生は？■□■

近時、毎年のように日本列島を襲う豪雨災害の中で、8月の熱海市豪雨のように、山間部の土砂崩れによる家の崩壊が目立っている。本作では、常に物語を語っていた音に対して、専属運転手という職業柄もあって、渡利の無口さが目立つ。『釣りバカ』シリーズでは、三國連太郎演じる鈴木社長の専属運転手をベテラン俳優の笹野高史が演じていたが、社長と専属運転手の関係はあれくらいが理想。つまり、運転手が社長のプライバシーを聞くのが厳禁であるのと同じように、社長が運転手の私生活を聞いたり、興味を持ったりするのも厳禁だ。しかし、家福と渡利が毎日片道1時間をサーブの中で過ごしていると、渡利の不幸な出自が次々と！しかも、渡利は今24歳というから、家福と音の子供が生きていれば、ちょうど同じ歳。そう考えると……。

第93回アカデミー賞作品賞、監督賞、主演女優賞の3部門を受賞したクロエ・ジャオ監督の『ノマドランド』（20年）（『シネマ48』24頁）は、ヒロインが自らキャンピングカーを運転して広大な米大陸を横断するロードムービーだったが、本作の最後は、渡利が運転するサーブによる北海道へのロードムービーになるので、それに注目！それは一体なぜ？その行き先はどこ？今なお残る建物の残骸を目に、2人は何を語るの？そして、2人は今生きていることの意味や価値をどう実感するの？北海道へのロードムービーの結末では、そんな人間の再生をしっかり確認したい。

他方、あれだけの時間をかけて稽古し続けてきた家福の演出指導による『ワーニャ伯父さん』の上演は？その成否は？

2021（令和3）年9月1日記